

Article 表紙解説

—うめ—

Cover Comment: UME

うめ
UME

(小沢高広・妹尾朝子)
ozawa.ume@gmail.com

三宅 陽一郎
Youichiro Miyake

株式会社スクウェア・エニックス
SQUARE ENIX CO., LTD.
y.m.4160@gmail.com

Keywords: art, robot, manga.



図 1 1月号表紙
作画：うめ
(小沢高広・妹尾朝子)

1. はじめに

今年も毎号、人工知能にちなんだイラストをそろえることで、多彩な表紙を楽しんでいただく企画を開催いたします。本年最初となる1月号の表紙を、うめ（小沢高広・妹尾朝子）先生に飾っていただきました。

近未来のお正月がテーマです。このようにペットロボットと一緒に散歩や、初詣ができるようになり、それと同時に、ペットの人工知能も、リアルタイムにさまざまな計算を、データベースを活用しながら高速にするようになると期待されます。

また、マルチエージェント技術で、人工知能同士のコミュニケーションを行うことで情報を共有し、計算負荷を減らしながら、あるいは情報の信頼度を高めながら、人間と共生していくことになる未来が来るのでしょうか。

2. 解説

小沢先生とは、筆者（三宅）が登壇した「マンガ×人工知能」というトークセッションの懇親会でお会いしました。マンガの中で人工知能はどう活用できるかについてお話を聴かせていただいたのがきっかけです。うめ先生は、ゲーム開発を題材にされた作品でテレビドラマ化もされた「大東京トイボックス」（幻冬舎コミックス）や、アップルコンピュータの葛藤を題材にした「ステップズ」（小学館）など話題作をリリースされ、技術にも造詣が深く、常にエンジニアや研究者にも刺激を与え続けています。人工知能にも深い関心をもたれており、今回表紙をお願いさせていただきました。

そこで小沢先生からは創作者、マンガ家という立場から、AIに思うところを率直に書いていただきました。以下、掲載させていただきます。

「AIがマンガを描く。

いつの日か、そんなこともあるかもしれないけれど、数十年の単位でまだ

ないだろうし、うーん、あんまり期待もしていない（当然、危惧もしていない）。ただAIが、打合せの相手をしてくれるというのは、あったらいいな、と思う未来だ。編集者の役割のうち、ネタ出しの部分だったら、何とかなったりしないもんだらうか。

例えば、次の展開を考えるという場面。ああだこうだと、いろいろなアイデアが飛び交う。編集者が出すネタというのは、何も正解である必要はない。むしろ、あさってな方向のアイデアを言ってくれて、そこを起点に思いもしなかった展開を作家が思いつくことは、エンタメ業界にいれば、誰もが経験あることだろう。

つまり大事なことは、精度よりも、こちらがスコーンと打ち返せるまで、心折れずに、根気良くアイデアを投げ続けてくれることなのである。

『あのキャラ、最近出てないですよね』

『ヒロインを追いつめませんか』

『主人公を空飛ばしましょうよ』

そんな感じのことをどんどん提案してほしい。夜中でも、お風呂でもいつでも相手をしてくれるというのは、たいへんありがたい。

あともう一つ贅沢を言うなら、読みにくい箇所を指摘してほしい。

『何ページの何コマ目がちょっとわかりにくいです』

もちろん作家が意図的にわかりにくくしているときもあるので、そのときは「そこは大丈夫」とこちらも言うだけである。もしかしたら、リアルな人間に言われるより、ストレスが少ないんじゃないだろうか。

そのうえ、

『主人公、右頬殴られましたけど、次ページで左頬が腫れています』

なんて、作画のミスの指摘までしてくれたら、もう最高である。

要するに、編集者とは、作家にとってファーストリーダだ。つまりAIに早くマンガが読めるようになってほしい。そこが、まずは第一歩なんだろう

と素人ながらに思う。その辺りにご興味のある方、もしプロマンガ家として役に立てることがあれば、ぜひ協力させてください。

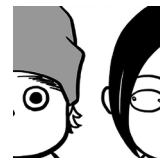
ちなみに、今回の表紙のイラストは、道案内を中心にガイド役をしてくれるAIネコである。最近普及してきたシェアリングサイクルみたいに、そこいらにいるネコがちょっとしたガイドをしてくれる未来、というのもまた楽しいかな、と思う。」

第一線のマンガ家から聴ける貴重なご意見であると思います。特に、マンガそのものではなくて、ネタを投げ続けてほしい、しかも正解のネタではなくても、それなりの提案でいい、それによって創作活動が促進されるというところは、目から鱗が落ちました。

また、ロジカルな間違いがあった場合の指摘は、品質保証における人工知能という分野で示唆に富んでいます。芸術、創作と人工知能が交わる年になる予感です。

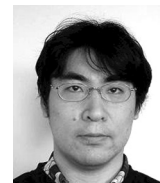
2017年12月15日 受理

著者紹介



うめ

企画・シナリオ・演出担当の小沢高広、作画・演出担当の妹尾朝子からなる二人組漫画家。代表作は『東京トイボックス』シリーズ。ほかに1970年代シリコンバレーの群雄割拠を描く『ステップズ』、文学と手土産がテーマの『おもたせしました。』など。また新たに、AIと天才女子高生の冒険と恋愛を描く『アイとアイザワ』（原作：かっぴー）を漫画アプリ『マンガトリガー』で連載する。



三宅 陽一郎（正会員）

株式会社スクウェア・エニックステクノロジー推進部リードAIリサーチャー。今年は人工知能学会誌編集委員として本誌の表紙を担当する。日本デジタルゲーム学会理事、芸術科学会理事、国際ゲーム開発者協会日本ゲームAI専門部会代表。